

園丁の「物質代謝論」註釈

「蝶の雑記帳 126 補遺」

著書『大洪水の前に』で斎藤幸平は、マルクスの「物質代謝論」が人新世の時代に立ち向かう指針を提示している、と論じた。実践を伴うその取り組みを大いに応援したい。老園丁は、マルクスの物質代謝論にわずかに残っている言葉使いの不備を、現代の自然科学的知見によって改善したいと考えて、「蝶の雑記帳 126」に一文を記した。老婆心から一箇所注意点を指摘したが、斎藤の新著『マルクス解体』を読んで、マルクスの物質代謝論の中心的な見解を示す文がエンゲルスの編修した版本『資本論』で乱れてしまった理由が分かったように思うので、この小文で示してみたい。裏目に出る恐れがあるけれども、園丁は斎藤と一致する見解にたどりつきたいと願っているのである。

当該の文は、『大洪水の前に』第二部第四章の 313～314 ページに出る。マルクスが、自然科学の知識を農業に適用して社会経済的な事象にアプローチする当時の研究に触発され、そこで使用されていた「物質代謝」という用語を用いて資本主義経済の批判を行なった箇所である。具体的に見てみよう。マルクスの『資本論』第三部手稿には、リービッヒという人の議論に依拠して、次のように書かれているという。

ア こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すの

であり、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる。

この文でマルクスは、——「社会的な物質代謝」（資本主義的な生産・交換・消費活動）と「自然的な物質代謝」の「連関」に、世界規模で深刻な攪乱が生じることを指摘している。そこには、資本主義の経済的形態規定と素材的世界における自然的諸制約のあいだに存在する緊張関係がはっきりと表現されている——、と斎藤は力説する。これが、斎藤の受けとめたマルクスの物質代謝論の核心である。

ところが、マルクスの死後に老エンゲルスが編修して出版された『資本論』では前半の下線を引いた文章が次のように変更されている。

イ こうして大土地所有は、**社会的な、生命の自然諸法則に規定された物質代謝の連関**のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出す

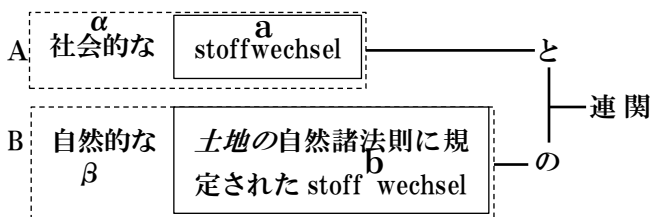
ごく最近まで『資本論』はイの文で読まれてきたが、斎藤は、エンゲルスによるこちらの文はマルクス本来の物質代謝論を歪めた、と言う。たしかに、マルクスのノートに記された文章の明快さが失われている。斎藤は、その著書でマルクスの思想へのエンゲルスの貢献を強調することを忘れないが、物質代謝論に関して両者に差異があると考ええる。けれども、人新世の時代にふさわしい斎藤の「物質代謝論」に大い

に賛同したい園丁は、その判断をちょっとだけ待ってほしい。

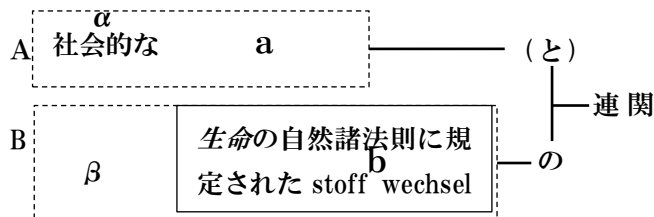
じっくり見れば、イの文は文法的におかしい。翻訳文だからではないだろう。形容語「社会的な」が孤立していてどの単語を修飾するのか不明になっているし、うしろにある複数のもののあいだを関係づけることば「連関」が本来の働きをしていない。「連関」がつなぐべき単語は何と何だろうか。

問題となる部分の構文（アで下線を引いた部分）を、論理のフローチャートにして分析しよう。

アの構文：



イの構文：



フローチャートにしたら、イの構文が、アの構文の翻案と

は考えられないほど不備であることが分かる。前半で、形容語 α 「社会的な」が形容しようとした名詞 a 「Stoffwechsel」が消失して、 A は語句として存立できなくなっている。後半では、 β 「自然的な」という形容語が消えているが名詞句 b があるので、 B は何とか意味をもつ語句となっている。しかし、一つの文は単語の線形的な並びでできているとする普通のやり方で読むと、 A は、「 αa と βb の連関」と単語の並びがよく対応して意味の通る語句なのに、 I は、 α と b が無理やり結びつけられた「 αb の連関」という意味不明な語句になってしまう。

だから、 I の文は錯誤を含んでいると考えなければならぬ。先の「蝶の雑記帳 126」では、「疲れていたエンゲルスが筆記するときミスをしたのだろうか、それとも植字工がミスをしたのだろうか」と書いたが、どうもそうではないようだ。それ以上のミスが発生していると考えた方がよい。斎藤の新著『マルクス解体』を読んでその原因が判明した、と思う。エンゲルスは、版本『資本論』の稿を起こすのに、マルクスの判読のむずかしい手稿を口述し別人に筆記させたのだという。斎藤は、 A の文の「土地」が I の文で「生命」となったのはマルクスのくせ字のせいかもしれない、と示唆している。そうだとすれば、 b の語句は A と I で同一となり、エンゲルスがマルクスの草稿をできるだけ忠実に再現しようとしていたということになる。

そういう口述筆記の文章を整理編集して版本の稿ができたのだ。老エンゲルスがその段階でイの文章の不備を見落としたのは悔やまれるが、マルクスの手稿が残っていてそれを修正できることを二人のために喜びたい。

さて、上のフローチャートで日本語訳の「物質代謝」を、Aでは一単語「stoffwechsel」とし、Bでは「stoff wechsel」と二つの単語に分ち書きした。「蝶の雑記帳 126」で触れたように、独和辞書はたいいてい、「stoffwechsel」を生理学用語として説明し、生体の生化学的な「新陳代謝すなわち物質代謝」の意味しか載せない。しかし、分ち書きした二つの単語は、それぞれ「物質・質料…」と「変移・交代…」を意味する。「stoff wechsel」は広く一般的な物質の変移を意味するのである。AとBでこのように区別して読みとれば、アの文章は、自然科学に適合する合理的な文章になる。

語句A「社会的な物質代謝」は、『資本論』の文脈から言って、人類の生命活動と経済的全生産活動を意味するだろう。その活動は、生態圏を巻きこんで、人体を維持する活動と人類にとって有用な諸構造物を生産するものである。そこでつくられる人体も人類が使用する構造物も、閉じた系にあれば熱力学第二法則によってついには構造を失う。人類の活動を、拡張した意味で“物質代謝”と呼ぶことは許されるだろう。それに対し、Bでの「自然諸法則に規定された物質代謝」という語句は、広く自然界一般で諸物質が連関しながら変移す

る事象を意味している。今の場合、Bの「土地の自然諸法則に規定された stoff wechsel」は、Aの拡張された意味での“物質代謝”作用が引き起こす自然の諸物質連関変移を指している。だから、もともと（エントロピーを排出し）生体構造の維持を意味する用語「物質代謝」は、Bには適切ではない。語句B「自然的な stoff wechsel」は一般的に「自然的な物質変移」ということばで表現するのがふさわしい。太古、シアノバクテリアは物質代謝によって炭水化物の構造体をつくり遊離酸素を排出したが、今、人類の“物質代謝”つまり生産活動が、シアノバクテリアの遺体である炭水化物と大気中の酸素を再結合させて、太古の物質変移の逆過程を行なっている。なんと驚くべき連関だろう。

こういうことから、アの文章にある中核的な部分を、細部を明確にして次のように表現する方がよいだろう。

こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と土地の自然諸法則に規定された物質変移の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出す…

ここでは、具体的に、「社会的な諸生産活動」と「それが土地に及ぼして引き起こす物質変移」の連関と表現することができる。けれども、人間と人類が自分たちの置かれている物質的な自然界に働きかけ助けられて生きていることを自覚させる点で、“物質代謝”ということばは棄てがたい。

2023 年 12 月冬至

海蝶 谷川修

